

ささやきボイスシリーズ 7

シチュエーション:僕の彼女は保健の先生

キャラ設定

如月 真由美 (24)

養護教諭

◎外見

身長:161 センチ

体重:上記身長で標準的な体重。

バスト:C カップ

セミロングの黒髪。(生徒の手本となるように髪は染めない)

長女という事もあり面倒見がいい。

実は養護教諭ではあるものの、理系教科に強い。

屁理屈に対しては徹底的に理論攻めで相手を説き伏せるのではなくコテンパンにする。

好きな人にはデレる。

◎家族構成

父、母、兄 (30)、真由美、妹 (19)

父親は大手量販店の管理職で課長。

母親は専業主婦の傍らファイナンシャルプランナーの資格を持ちネット上で相談サービスをしている。

兄はプログラマーとして現在アメリカに拠点を置いており、ここ数年上位ランカーとして有名。

妹は大学で日本史を先攻しており、将来は日本史の教師を目指す。

◎特技・エピソード

堅実な父親と活発な母親の間に生まれた。

優しい兄にやや甘やかされつつも勉強面は厳しい家庭で育ち、厳しい中での兄の優しさに人に優しくする仕事がしたいと考えるように。

ただ優しいだけではダメだという事を兄に言われ様々な事に反論できるようになるよう諭される。

事実、兄は優しいのだが敵に対峙した際は毅然としているらしい。

兄が 26 の時に勤めていたゲーム会社から趣味でやっていたプログラマーに本格転向。アメリカに渡った後は兄から言われたことを思い出しながら妹に兄と同じように優しく接してきた。

兄の優しさから養護教諭を目指すきっかけになり、大学を教育学部で養護教諭育成課程を選択する。

◎将来の夢

大人はおろか、子供さえストレスに曝される現代社会において養護教諭という仕事が重要だと感じ、最近「現代社会の心の健康」をテーマにいかに関心する人への配慮が社会全体のストレス軽減に役立つかで養護教諭の傍ら論文を書いている。

将来は養護教諭としてだけでなくカウンセラーとしても社会の役に立てないかと思案中。

#### ◎性格・人物

基本的には物腰柔らかく、優しいがいざという時は毅然とした態度が取れる。

保健室でサボる生徒には優しく接しながら問題点を聞き出して、本人のために成らない時には言葉こそ優しいが厳しく諭す。その結果、基本的に保健室にサボりに来る生徒はいない。

またいじめやその他、保健室以外の居場所がないと分かるとその生徒を受け入れ保健室以外で生活できるように問題解決を行う。いじめ等の場合は周りが知らないうちになぜか「問題」が解決しておりあまりに問題のある生徒は自主退学している。他にも保護者が変わったり、生活態度が著しく改善したりする。一体、裏で何をしているのかは誰にも分からない。

#### ◎主人公設定と主人公への思い。

主人公は真由美によって不良から模範生徒に 180 度変わった。以降、真由美とは親しくしておりある日、真由美に猛烈アタック！その熱い想いに打たれて教師という立場であるものの卒業してからという条件で付き合う事になった。

はずだったのだが、真由美の気持ちの方が相手を好きになってしまい事あることに保健でいちゃついてしまう事も(笑)

基本、好きになった相手にはとっても甘やかしてしまうのである。

ープロットー

<チャプター1:保健室の先生！>

体育の時間で捻挫をしてしまった主人公は保健室へ行く。

けがを心配して優しく手当てをしてくれる真由美。

手当が終わり他の生徒がいない事もあり、今度は心配がピークに過保護モードへ。

<チャプター2:僕の前ではあまあま彼女>

放課後、保健室へ遊びに来た主人公。

しかし保健室は遊びに来る場所じゃないとお説教モードになるも、先生に会いたかったんだと言われて急にしおれてあまあまモードへ。

保健室のベッドで、耳かき、ささやき、最後は愛の言葉を耳元でささやく甘やかしっぷりに。

—台本—

<チャプター1>

【SE:保健室のドアの開く音】

<音声:正面。やや離れている感じで>

「あら？どうしたの？」

「え？捻挫しちゃったの？大丈夫？」

「ほらほら、こっち来てベッドでいいから座って」

<音声:正面。向かい合うくらいの距離>

「ちょっと見るわね。靴下脱がすから少し痛むかも知れないけど、我慢してて？」

【↓:痛そうだなという雰囲気で】

「あー、これは派手に腫れちゃってるわね」

「確か、君のクラスはバスケットだったかしら？熱くなっちゃったの？」

「もうー、気を付けないとダメじゃない」

「ちょっと待ってなさい。湿布持ってくるから」

<音声:少し遠め>

「湿布は確か、この棚に……。あ、あった！あった！」

<音声:正面。向かい合うくらいの距離>

「じゃあ、貼るわよー」

「ひんやりして気持ちいいでしょ？」

結構、腫れているから今日か明日にちゃんと病院に行って診てもらって来なさい」

<音声:右耳の耳元(無音のささやき)>

「なんなら、先生と一緒に行ってあげようか？」

<音声:正面。向かい合うくらいの距離>

「ふふふ、冗談よー 一応、付き添いのお姉さんくらいには見られるかしらね？」

「え？どうせならちゃんと恋人に見られたい？」

<照れた感じで>

「も、もう、君は！油断ならないわね！」

「先生もちゃんと恋人に見られたいでしょって」

「そ、それはそうだけど。それはそれで問題あるのよねー

教師と生徒なんて禁断な関係って感づかれても」

<音声:ちょっと笑いが入ったような口調で>

「え？禁断な関係って自分で言うかって？ もちろん、冗談よ」

「ほら、そんなことばかり言っていないで。もう応急処置は終わってるのよ」

「あ、それにしても、君が怪我するなんて珍しいわね」

「保健室でフケてはいたけど、基本的に君は運動が得意だったでしょ？」

去年の球技大会は、その身体能力を活かして学年優勝したくらいだしね？」

「え？わたしのところで改心してから、勉強にハマってちょっと運動不足なの？」  
「勉強するのはいい事だけど、適度な運動はしないとダメじゃない」  
「普段はどんな運動をしてるの？」  
「えっと、ランニング5キロにサーキットトレーニングを30回の3セット。  
その後はケアの柔軟をしている、と……。運動部に所属していない高校生としては十分ねー」  
「昔は？」  
「へえー ランニングは15キロ、サーキットトレーニングが100回の3セットだったの？」  
「あー、何となくわかったわー」  
「あれね、前までの身体能力から考えてトレーニング量が少なくなったから、  
体がついていかなかったってところかしら」  
「もう、無理しちゃダメよ？」  
＜音声：左耳の耳元（無音のささやき）＞  
「だって、君はわたしの恋人なんだからね？」

## ＜CHAPTER2＞

【SE：保健室のドアの開く音】  
＜音声：正面。やや離れている感じで＞  
「あ、君。もう足は大丈夫なの？」  
「そう、若いから治りも早いわね」  
「今日はどうしたの？え、遊びに？」  
＜音声：正面。向かい合う距離＞  
「もう、保健室は遊びの場じゃないのよ？ここは生徒の最後の砦なんだからね？」  
「不良だった、君もここで改心して今では真面目だし」  
「あとはこの前の君みたいに、怪我した生徒の手当てもしないとならないのよ」  
「え？わたしに会いたかったって」  
「もう、君はそうやってわたしを喜ばそうとするんだから」  
「でも、そう思って来てくれたのは嬉しいわよ」  
「え！甘えたいって……」  
「今は自分だけの先生に甘えたいだなんて……。君ね、そんな事を言われちゃったら断れないじゃない」  
＜音方向：少し左から聞こえてくるように。以降指示あるまで方向はこのまま＞  
＜↓ベッドに腰掛けるように＞  
「いいしょと。ほら、先生の膝の上に頭置いて」  
＜ここからは可愛い年下の彼氏を甘やかせる雰囲気＞  
「え？何をするのかって？耳かきしてあげるの」  
「ほら、この前、先生に耳かきして貰いたな一って言ってたじゃない？」

「他の生徒が来たらどうするのかって？」

「その生徒には、今度彼氏に耳かきするんだけど、君も練習台になってくれない？って言えばいいわ」

「さあ、どうぞ」

<音方向:右側。距離は至近距離>

「ふふふ、ちょっと太ももがくすぐったいわね」

「君の髪はちょっと硬いからかな？」

「ん？どうしたの？」

「わたしが良い匂いがする？当然じゃない。

洗濯はもちろん嫌味にならない香りが漂う洗剤と、

ほんのり花の香りがする柔軟剤を使ってるのよ」

「そう、だから先生は良い香りがするのよー」

「それじゃ、まずは右耳を見ていきましょうねー」

「うん？君、あまり耳掃除しないでしょ？ちょっと溜まってるわ」

「掻くわよ」

<ここは約一分間、耳を掻いてる時の息遣いを収録>

<耳かき音>

「気持ちよさそうね？ふふふ、寝ちやいそう？なんなら寝ちやつてもいいからね？」

<ここは息遣い使いまわし。>

<耳かき音>

「はい、右耳は終わりよ」

「じゃあ、次は左耳だから反対側を向いてね」

<音方向:左側。距離は至近距離。以降指示あるまで方向と距離は固定>

「うーん、こっちも良い感じに溜まってるわね。やりがいの、ありそうだわ」

<ここは約一分間、耳を掻いてる時の息遣いを収録>

<耳かき音>

「寝ちやった？」

「まだ起きてたのね、このまま続ける？」

「じゃあ、続けるわね」

<ここは息遣い使いまわし。>

<耳かき音>

「はい、終わり」

「余程、気持ちが良かったのね？君、ウトウトしてたわよ？」

「あー、今度、私もやってもらいたいな」

「え？人の耳を掻くのは怖い？ふふふ、まあ、そうね」

「じゃあ、怖くなくなったら、よろしくね？」

「さて、次は耳に息を吹きかけてあげる」

「このまま左耳から行くわね？」

<約一分間、左耳への吹きかけ>

「これも気持ちよさそうね～、見てて愛おしくなるわ」

「じゃあ、反対側も」

<音方向:右側。距離は至近距離>

「存分に味わってね」

<約一分間、右耳への吹きかけ>

「ふふふ、顔がだらしないわよ」

「ここからはスペシャルサービスをして、あ・げ・る」

「え？何をするのかって？」

「こうするのよ」

<雰囲気:少し甘えたような、それでいて求めるような感じで>

<声:以降は無音ささやき>

「どう？こういう風に耳元で吐息を感じるようにささやかれるの？」

「くすぐったい？ふふふ、そうね」

「もちろん、これだけじゃないのよ？ここからが本番」

「好きよ」

「君が好き」

「だーい好きよ」

<ここから先は右耳に1分間好き連呼。数種類のバリエーション、アドリブで>

<正面を通りながら左耳に移動>

<ここから先は左耳に1分間好き連呼。数種類のバリエーション、アドリブで>

「ふふふ、どうだった？」

「え？先生が好きだって？」

「ありがとう。わたしも好きよ」

<キス音を一回入れる>

「ふふふ、わたしの可愛い彼氏さん」